

バウムガルテンによる諸学の基礎づけ

——形而上学から美学へ——

オーガナイザー・提題者	増山浩人	(電気通信大学)
提題者	津田菜里	(一橋大学)
	井奥陽子	(東京芸術大学)
	桑原俊介	(上智大学)

ワークショップの主旨

A.G.バウムガルテン(1714-1762)は18世紀ドイツで活躍した啓蒙合理主義者であり、美学の創始者として知られている。しかし、彼のもう一つの名著『形而上学』に関する研究も哲学・倫理学分野では脈々と進められてきた。それは主に以下の理由による。一つ目の理由は、同書において、バウムガルテンがライプニッツのモノド論や予定調和説に微妙な改訂を加えつつ、自らの体系に組み入れたからである。そのため、同書とライプニッツの著作を比較することによって、18世紀ドイツにおけるライプニッツ受容の一端を知ることができる。こうした関心に基づく研究としては、K.E. Kaehler や D. Mirbach のものがある。二つ目の理由は、カントが同書第四版を教科書とした形而上学講義を約40年間行ってきたからである。そのため、同書と同書に対するカントの言及を比較検討することによって、カント哲学の成立史や源泉史を明らかにすることができる。こうした研究の代表例としては、ドイツ語圏では N. Hinske に端を発する一連の概念史のカント研究、英米圏では L.W. Beck, E. Watkins, C. Dyck などの研究が挙げられる。以上のように、バウムガルテンの『形而上学』研究はもっぱらライプニッツ研究やカント研究を補完するために、あるいは「ライプニッツとカントの間」の18世紀ドイツ哲学史におけるミッシング・リンクを埋めるために行われてきたのである。

だが、上記の研究において、バウムガルテンの『形而上学』は各論的に扱われてきた。そのため、M. Casula や A. Aichele の論文・著書を除き、同書に関する体系的な研究はほとんど行われてこなかった。それに加え、同書第一版～第三版序文の比較や第一版～第四版本文間の異同も十分検討されてこなかった。この二つの問題点がバウムガルテン形而上学のオリジナリティや形成過程を覆い隠す一因となってきた。

以上の問題点に対処するために、本ワークショップでは、「人間的認識の第一諸原理に関する学」という彼の形而上学定義に着目したい。この定義によれば、形而上学は他の諸学で扱う基礎概念、基礎原則を定義する学だとされる。確かに、このタイプの形而上学定義は、デカルトの『哲学原理』やヴォルフの『ドイツ語著作詳解』にも見出される。しかし、バウムガルテンのオリジナリティは、この定義に徹底的に忠実な仕方でも著作活動を行った点にある。本ワークショップの目的は、『形而上学』において諸学が基礎づけられる場面を四人の提題者が異なるアプローチで切り出すことによって、バウムガルテンの『形而上学』の全体像、形成過程、哲学史上の意義を明らかにすることである。

提題者の紹介とワークショップの構成

本ワークショップでは、『カントの世界論——バウムガルテンとヒュームに対する応答』を2015年に出版したオーガナイザーの増山浩人、バウムガルテンの実体論や18世紀ドイツでのスピノザ受容史の研究に従事する津田菜里、今年2月に『バウムガルテンの美学——図像と認識の修辞学』を出版した井奥陽子、バ

ウムガルテン美学に関連する論文を複数出版している桑原俊介の計四名が提題を行う。本ワークショップは、オーガナイザーが主旨説明を行った後、以下の二部構成で進められる。

第一部『形而上学』の各部門間の基礎づけ関係(増山、津田)

『形而上学』は、存在論、世界論、心理学、自然神学の四部門から構成される。これらの部門が「人間的認識の第一諸原理」を含むのは、先行する部門(e.g. 世界論)が後続する部門(e.g. 心理学と自然神学)で使用される基礎概念・基礎原則を定義するからである。第一部では、彼の形而上学の手法と特色を紹介しつつ、この四部門間の基礎づけ関係の内実を示したい。

まず、増山が世界論に関する発表を行う。バウムガルテンは存在論で扱われた存在者一般に妥当する一連の述語群を世界に適用することによって、世界の認識を試みている。これは、理性に基づく世界認識であり、カントがカテゴリーの超越論的使用と呼んだ手続きでもある。他方で、彼は経験に基づいて世界を認識する必要があるとも主張した。この発表では、他の三部門との比較を交えつつ「世界論」部門第一章「世界の概念」の議論を紹介することで、彼の世界論において経験と理性が相補的役割を果たしていることが明らかにされる。

次に、津田がバウムガルテンの実体論の形成過程を考察する。『形而上学』第二版において、彼は第一版の実体に関する記述を大幅に書き換えている。この発表では、主に『形而上学』第二版序文に依拠して、この書き換えの目的が、1. アリストテレス、デカルト、ヴォルフの実体定義の問題点を克服すること、2. 真の実体=モノドだけでなく、物体=「実体化された現象」にも当てはまる実体定義を行うこと、の二点にあったことが明らかにされる。さらにこのことから、彼の实体論がどのような仕方でも世界論、心理学、自然神学の前提となっているかも示される。

第二部『美学』の基礎論としての『形而上学』(井奥、桑原)

次に第二部では、特に先行研究が分厚い『美学』と『形而上学』との関係に焦点を当て、『形而上学』で扱われた基礎概念・基礎原則による他の諸学の基礎づけの内実を明らかにしたい。

まず、井奥がバウムガルテンの美学定義に関する発表を行う。美学を「感性的認識の学」と定義したことは、彼の最も大きな功績の一つとされている。しかし、この定義中の「感性的認識」の内実は、『形而上学』「心理学」部門第一章「経験的心理学」で展開されているライプニッツ流の表象理論や多様な下級認識能力に関する議論を前提にしてのみ正確に理解することができる。この発表では、美学に関する定義・規定を『形而上学』の記述に即して解釈し直すことで、『美学』で展開された詩学・修辞学に基づく文芸創作論を彼が「感性的認識の学」と呼びえた理由が明らかにされる。

最後に桑原が美学と存在論との関係に関する発表を行う。美学を基礎づけるために、バウムガルテンはそれまでの哲学史でもっぱら「非存在(non ens)」とみなされてきた詩的虚構を「存在者(ens)」と認定するための道具立てを確立した。これらの道具立ての中には、「自己矛盾を含まないもの」という「可能なもの(possibile)」の定義、「現実性の実在性への還元」といったカントが批判を向けたものも含まれている。この発表では、主に『形而上学』「存在論」部門と『美学』との比較を通じて、これらの道具立ての内実と美学における役割が明らかにされる。